金沢の景観文脈を読む

風景が綴るまち物語

金沢には、誰でも美しいと思う場所、懐かしく感じる町などが数多くあります。

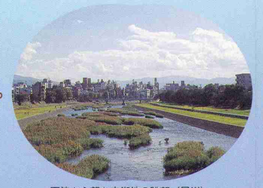
しかし、実際に私たちが歩きながら感じたり、眺めたりするまちなみや風景は、一場面ずつ独立してあるのではなく、周辺との関係(空間)や町の歴史(時間)などの繋がりや変化の中で豊かな表情を見せているのです。

●沢市の「都市景観形成基本計画」では、風景が綴る脈絡(景観文脈)を読み取り生かすために、7つのキーワードを提案しています。

こんな見方で町を歩いてみると、身近な風景の中に新しい発見や想いが生まれ、物語を組み立てるように、まちづくりの豊かなイメージを膨らませることができるのではないでしょうか。

眺望（ちょうぼう）

台地などからの眺望により地形や市街地の特徴を感じさせる景観


下流から望む市街地の眺望（犀川）

河口付近の眺望（大野町）

台地上からの眺望も金沢の特徴（寺町台地より）

坂道で広がる眺望（八坂より）

高層ビルから眺める市街地（ポルテ金沢より）

水と緑が美しい川筋の眺望（浅野川）

集積（しゅうせき）

寺院群や町家群など、特徴とまとまりのある まちなみの景観

文学作品に見る金沢の景観

（「恋歌」五木寛之　昭和43／引用）

「石川門から兼六園を回って、タクシーを拾うと、二人は卯辰山の曲りくねったドライブ・ウェイをのぼって行った。目の下に金沢の市街が次第に拡がって来る。

車を待たせておいて、亜由美は松林の中を小●丘に登って行った。（中略）丘の頂上からの●に展望がひらけた。（中略）目の下に家々の鉛色に輝く瓦の波が続いている。」

寺院群（卯辰山山麓寺院群）

寺院群を感じさせる土塀と緑（野町）

寺院群を感じさせる竹垣（寺町）

武家屋敷を感じさせる門、土塀（長町）

茶屋街（旧主計町）

黒瓦の町屋群（東山）

縁（へり）

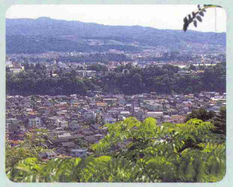
台地の縁や坂道・石垣など地形の縁の特徴を感じさせる景観

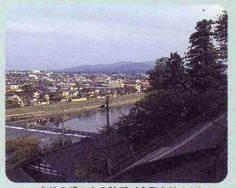
曲がりくねる坂道を下る（馬坂）

縁を直角に下る（長良坂）

縁の石垣に沿って上る（桜坂）

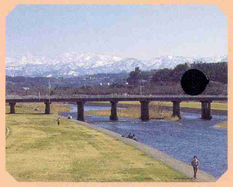
石垣と階段（石伐坂）


台地の縁を示す緑（卯辰山から寺町台地）


台地の縁からの眺望（寺町台地より）

定位（ていい）

山や台地、高層ビルなど都市の構造や方向性を感じる景観や眺望


地形の方向を感じる山（下菊橋より）

街の構造を示すビル群（駅前の高層ビル）

城は時代を超えたシンボル（石川門）

旧街道の目印となる松の大木（旧北国街道、北森本町）

見通しにそびえる高層ビル（彦三町より）

街の入り口のモニュメント（鈴見町）

対比（たいひ）

歴史と現代、表と裏など変化と対比を感じさせる景観

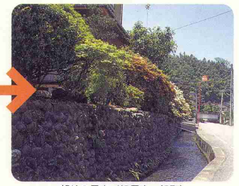
文学作品に見る金沢の景観

（「長町の川面（随筆　誰が屋根の下）」室生犀星　昭和31／引用）

「長町の川は犀川の辰巳用水から引かれ、市街の中央をまがりくねって走り、水量は豊満で、川床は浅いためにせせらぎは美しい。用水は北加賀一帯の田地に引かれていて、古い武家屋敷の築地の石垣際にも、機つかの水車小屋の間を抜け、そして流れは下町から田園にぬけてゆく。

この長い川べりを私は毎朝歩いて、小学校に通った。家鴨の群が水の上に詩を書き、川面すれすれに垂れた小枝には、毎日巴旦杏がいろづいて行った。（中略）午後の帰校時間は川の水はよごれて、家鴨の白い浮羽根は日表になり、該しかった。そしてそれは初夏のひるすぎらしい風物の疲労を現はしていた。」

町中の用水（大野庄用水、長町）


郊外の用水（旭用水、旭町）

現代的な大通り（尾山町、高岡町）

大通りからのぞく歴史的建物（尾山神社）

賑わう商店街（堅町）

一歩裏の閑静な住宅地（里見町）

中心と周縁（ちゅうしんとしゅうえん）

城跡や都心などの中心性と、周辺のまちなみの周縁性を対比させ、町の構造を際立たせる景観

街の中心となる城郭の土塀（出羽町）

周辺の武家屋敷群の土塀（長町）

周縁性を示す石垣（東兼六町）

中心部の格式を感じる石積み（出羽町）

連続（れんぞく）

川や道路など、線的につながりのある景観の特徴

文学作品に見る金沢の景観

（「照葉狂言」泉鏡花　明治29／引用）

「我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。

両側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、此町は一端のみぞ大通りに連りて、一方の口は行留りとなりたれば、往来少なかりき。

朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに日を送りぬ。」

用水に沿って移り変わる風景（大野庄用水）

用水に沿って移り変わる風景（大野庄用水）

用水に沿って移り変わる風景（大野庄用水）

鏡花も歩いた町家の連なる通り（旧新町）

旧街道に沿って歩く（旧北国街道、泉）

旧街道に沿って歩く（旧北国街道、北森本町）

わたしのかなざわ

条

例がせめて二〇～三〇年前に制定されていたらという思いがあります。戦災を逃れた金沢の景観は、日本の財産だったはずです。しかし経済と効率の優先主義で、すでに他都市と変わらぬ様相を見せつつあります。すべて昔のままが良いとは思いませんが、節度ある開発と私権を制限される地域への補償によって「いいね金沢」が維持されてほしいものです。

街中で犀川の清流とともに緑の寺町台越しに望む白山連峰は優れた景観ですが、台地上に増えるビルは異物。御荷川、鞍月用水に増えた私橋は、すべて駐車場でまったく趣の風情をとどめません。

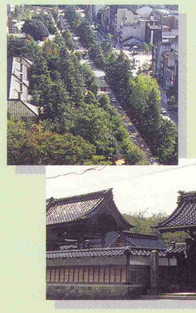
（金沢在住・七〇代・男性・写真家）

県

出身地だと言うと必ず「いいところですね」と言われました。ところがそう言う私には一度行ったらもういいと言う感想を持つ人たちがかなり多かったと記憶しています。つまり何度も訪れたいと思わせる程の魅力がないのに、一度は訪れたいと思わせてしまう街が金沢なのだろうと思います。

ここ二〇年程で、アートリオの建設などで景観にかなりの変化がありました。この金沢が、外から見たときどういう所だと思われているか、もっと知りたいと思います。

（金沢在住・二〇代・女性・会社員）



街

並み保存として考えておられる建物は明治、大正時代の住宅であり、現代生活に合わず、住民は内部の模様変えにより対応している現状です。規制により古い建物を守ることも大事であるが、そこに住む住民が快適な生活をおくれるよう、財政面も含め考えていただきたい。

（金沢在住・六〇代・男性）

寺

町サミットに参加しました寺町という主旨には賛成できるものがありました。また、みち筋整備事業やこまちなみ条例などが実施されていますが、これらが観光という目的に偏ることなく、市民の生活が潤うまちづくりを期待しています。

（金沢在住・二〇代・男性・学生）

以

前、テレビ番組で海外の学校の様子を見る機会がありました。そのとき考えさせられたことがあります。それは「色」です。ロッカーが実にカラフル。日本の学校ですと灰色、制服にいたっては紺が主流です。子供たちには未来があります。一人一人の個性があります。「みんな同じ」ではつまらないのではないでしょうか。そこには生き生きとした暮らしをしたいと思っても、実に閉鎖的な色彩の中で暮らしていくのでは、これからの国際社会を生き抜いてもらわねばならぬ子供たちに夢を与えられないのではないでしょうか。

まず未来の子供たちに様々な夢を持たせることから「まちなみづくり」を考えてみてはいかがでしょうか。

（金沢在住・三〇代・女性）

「住

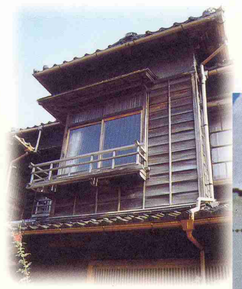
み心地良い街並み」と言葉で表現することは容易です。しかし親子代々生まれ育つという生活実態が失われつつある現代において、住む人々の生活と両立するだろうか。

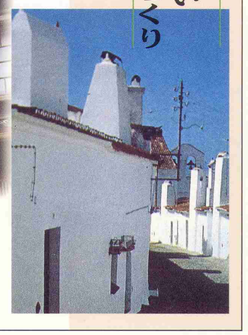
伝統は停滞でなく進歩する中から生まれると言われます。「いいね金沢」「街並み」とは何だろうということを考えてみたい。

（金沢在住・七〇代・男性）

金沢らしいまちづくり

外国人建築家が見る金沢



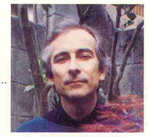


私は二五年前に初めて来日し、大学で研究したテーマが「日本の木造建築」でした。地中海文化の国から来たため、日本の木造建築にとても魅力を感じました。というのは、日本の木造建築はヨーロッパ人の目から見ととても幾何学的で強い存在感がありました。畳、ふすま、障子といったものにきちっとしたさまがあり、モジュールというか、基本がしっかりあるわけです。ヨーロッパ、特に地中海圏の建築には幾何学、数学が存在しません。建築の線、設計の線、スペースの流れなどは自然な形になっているのです。

その後一七年間、日本を離れ、再び来日したときに感じたのは、日本人は自分で自分の国の文化を壊しているということでした。特に建築文化を。

私は、その理由を考えてみました。まず一つは、「ルール」がないということです。日本では自分の土地には何でも好きなものを建ててもよく、街としてのコーディネートがされていないということです。ポルトガルには、完璧ではないですが、「ルール」があります。だから何とか街並みの「馴染み」を感じることができます。しかし日本では、鉄筋コンクリートの四角いビルの隣に木造の平屋の建物が建てられ、色もばらばらです。目に見える街並みの風景が全然コーディネートされていないのです。街並みに「馴染み」がないのです。そもそも日本の文化は「馴染み」の文化だと思います。和の文化だと思います。しかしながら、建築にそれがなくなっているのではありません。素朴でも素晴らしい、素朴な方がずっと素晴らしいということに、建築家も気付くべきだと思います。

最後に、景観を考えたとき、この土地は自分の土地だけれども、ここに作るものは皆みんなが見るということを、全ての人が自覚することが重要だと思います。みにくいもの、恐ろしいものを建てることはみんなに迷惑をかけるということに気付かなければなりません。ヨーロッパの国ではそのような迷惑をなくすために法律やルールがあるのです。私は金沢に来てまだ五年余りですが、金沢はまだ大丈夫だと思います。また金沢の価値観は守られていると思います。これからもその価値観を大事にしていってほしいと思います。



Alberto Cidraes
（アルベルト・スイドライス）
建築家・陶芸家

ポルトガル出身。ポルトガル美術大学、九州大学で建築学を学ぶ。その後ブラジルへ渡り陶芸家として活躍。リスボンアルコの陶芸学部長を経て、1990年に金沢へ。現在、金沢国際デザイン研究所でデザインを教える。